

# 第21回 福岡県美しいまちづくり建築賞 受賞作品

## 大賞受賞作品

住宅の部 作品名 東神原の家

建築主 (株)ジェイリンク

設計者 古森弘一建設設計事務所 古森弘一 橋迫弘平

施工者 (株)安井組 代表取締役社長 安井玄治

一般建築の部 作品名 アクア博多

建築主 福岡ビルディング(有)

設計者 清水建設(株)一級建築士事務所 藤本裕之

施工者 清水建設(株)九州支店 執行役員九州支店長 寺田修

## 優秀賞受賞作品

住宅の部 作品名 那珂川の家

建築主 森永正之

設計者 (株)森裕建設設計事務所 代表取締役 森裕

施工者 道津建築舎 代表 道津健二

一般建築の部 作品名 味の兵四郎

建築主 (有)味の兵四郎 代表取締役 野見山正輝

設計者 (株)ロイ設計事務所 代表取締役 山本敏元

施工者 清水建設(株)九州支店 執行役員九州支店長 寺田修

## 財団法人 福岡県建築住宅センター 奨励賞

作品名 蔵のある家

建築主 (有)辛陽

設計者 (有)Y 設計室 代表取締役 家原英生

施工者 (株)大林組九州支店 常務執行役員支店長 内田弘通

作品名 第2宅老所よりあい

建築主 社会福祉法人福岡ひかり福祉会 理事長 伊藤明夫

設計者 風土計画一級建築士事務所 代表 大坪克也

施工者 (株)山口工務店 代表取締役 山口博徳

---

## 第21回福岡県美しいまちづくり建築賞総評

2008年度第21回「福岡県美しいまちづくり建築賞」には、福岡市を含む福岡地域から47件、北九州地域から14件、筑豊地域から4件、築後地域から19件、総計84件の応募作品がありました。賞の選考は、「住宅の部」と「一般建築の部」の2部門それぞれに、大賞、優秀賞、奨励賞を10名の委員の選考委員会が行ない、表彰は、各作品の所有者、設計者、施工者、団体の代表者などの方に対して、大賞、優秀賞は福岡県知事が、奨励賞は(財)福岡県建築住宅センター理事長が行います。

賞の対象となる作品は、福岡県の「地域の自然、風景、歴史、文化、生活、活動等を背景とした景観の形成に寄与するとともに、建築計画において優れた建築物」となっています。本年度の応募作品からは、景観の形成に寄与するだけでなく、省エネや環境への配慮、高齢化福祉対策など、「建築と持続可能な生活環境」を重視した建築計画を多く読み取ることができました。第2次選考の現地審査に選出された作品は、いずれもそれぞれの建築に与えられたプログラムに対して高度に知的な尽力がなされていて、各賞の選考はとても難しい判断を要しました。最後は選考委員の投票で各賞を決定せざるを得ませんでした。集計された各作品の評価ポイントが極めて僅差となったことが印象に残ります。

住宅部門の大賞受賞作品「東神原の家」は、歴史ある住宅地において、植栽がすがすがしい庭のなかに建築を配置して、敷地ごと周囲の景観になじませ、住まいのなかに新しいライフスタイルを演出しています。優秀賞受賞作品「House in Nakagawa」は、宅地化が進む福岡市郊外に残る一枚の水田に向けて開いた縁側の風景と、住宅内を吹き抜ける風の通り道をデザインしていて、伝統的な日本家屋を思わせる開放感を創っています。奨励賞受賞作品「蔵のある家」は、旧いお屋敷を修理修景したデザインで、古い建物と新しい住居が一体となったスケールの大きい地域の歴史的景観を蘇らせています。

一般建築部門の大賞受賞作品「アクア博多」は、那珂川のさざなみをモデルに設計されたというガラスのカーテンウォールが特徴的なリズムを生み出し、福岡市の中州境界に新しい都市景観を創りだしています。優秀賞受賞作品「味の兵四郎」は、社員が提案するオフィス環境を設計プロポーザルで選ばれた建築設計事務所が担当するという建築づくりの発想が斬新であり、アメニティの

ある現代的な室内環境のあり方を示唆しています。奨励賞受賞作品「第2宅老所よりあい」は、木造建築のスケール感がお年寄りに心地いい地域密着型高齢者施設であり、伝統的な日本家屋の建築文化を活かした福祉施設のあり方を提示しています。

## 大賞 住宅の部

### 東神原の家



建築主：(株)ジェイリンク 代表取締役社長 猪ノ口彰  
設計者：古森弘一建築設計事務所 古森弘一 橋迫弘平  
施工者：(株)安井組 代表取締役社長 安井玄治



設計趣旨

講評

近隣との関係で建物の形態が決まった。

- ① 敷地北側に古くからある企業の社交場洞海倶楽部に採光が確保できるよう適切な距離をとり、北側隣地の採光を確保した。
- ② 前面道路に建築物が圧迫感を与えないよう敷地を掘り込み、また道路側の建物の高さを抑えた。
- ③ 成熟した街に馴染んでくれるよう極力自然素材を用いた。
- ④ 街に対する敬意として、敷地内に可能な限り沢山の樹を植えることとした。

「敷地が持つ特殊条件」を深く読みとり、その場所でしか得ることのできない建築のあり方を探った。

北になだらかに傾斜する土地の南側を0.7m掘込み2階建てコンクリート造建築の高さとボリュームを抑えるとともに、敷地四周に配した庭に多種混在の草木を植え込むことで、東神原住宅地にふさわしい自然感のある景観を生み出している。建物とガレージを隣地から適切な距離をおく配置計画は、北側隣地の日照確保を考慮した住環境形成のあり方を示す要を得た設計となっている。2階を構成する日常生活空間は、全ての部屋に2箇所の出入り口を設けてあちこちとぐるぐる廻ることができる。洗面浴室、キッチン、リビングダイニング、個室のそれぞれの空間は閉じることなく広々とつながり、何処にいても家族の気配が感じられる新しいライフスタイルを演出している。特に家族のみんなが集まる場と子どもの場を開閉自由にした間仕切りの仕掛けは、子どもの成長過程にあわせて変化できる融通性を持つ興味深いデザインである。樹木の成長は未だであるが、周辺に配慮して景観を整え新しい建築計画を提案したこの住宅は、建築賞にふさわしい優れた作品として評価できる。

大賞 一般建築の部

アクア博多



建築主：福岡ビルディング(有)  
 設計者：清水建設(株)一級建築士事務所 藤本裕之  
 施工者：清水建設(株)九州支店 執行役員九州支店長 寺田修



### 設計趣旨

中洲の新しいランドマークとして、街のコンテクストに相応しく存在感ある建物を目指した。街の魅力を“水都”“商都”“楽都”の3点で捉えて建物を構成した。“水”はガラスの反射/透過を用いて表現を試みた。那珂川の水辺に光るさざ波をイメージし、光・空・街の灯により、Low-Eガラスと熱線反射ガラスによるパターン構成のカーテンウォールに様々な表情が浮び上がるファサードとした。“商”はオフィス・ブライダル・ショップの複合ビルとし、中洲の街並・雰囲気配慮した施設づくりを行った。“楽”は行灯のような柱のある広場、天空の中庭、アイキャッチとなるガラスファサードの中に浮かぶチャペル等の仕掛けを用いて、この街の楽しさを表現した。

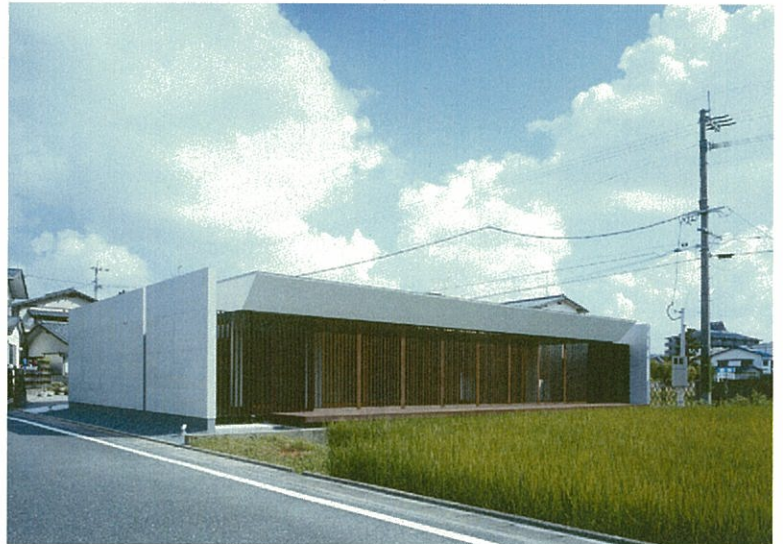
### 講評

念入りに組み合わせられたLow-Eガラスと熱線反射ガラスのユニットカーテンウォールが、オフィス、ブライダル、ショップの複合ビルとして、福岡市中州界隈に新しい風景を創りだしている。設計者によると、敷地の向いを流れる那珂川のさざなみをモデルにしたという。ガラスのファサードの最頂部に据えられた小さなボリュームのチャペルは、周辺からのランドマークとなり、水辺とつながる中洲繁華街の都市景観を新鮮なものにしている。オフィスやブライダル空間は、さわやかな透明感に包まれていて、天神のビル界隈への眺望が心地よい。オフィスの一角にデザインされた時間制貸し室は、都市部のオフィスビル機能としての新しさが、一般の人にも活用したい都市空間のひとつとなっている。道に接して公開空地が設定されたショップ廻りは、接続する川辺の緑道景観に魅力ある都市

の賑わいを創りだしていくことと思う。建築全体の隅々のデザインにまで配慮が行き届いたこの作品は、担当された設計チームと施工チームの高い技術力の結晶として評価できる。

優秀賞 住宅の部

## 那珂川の家



建築主：森永正之

設計者：(株)森裕建築設計事務所 代表取締役 森裕

施工者：道津建築舎 代表 道津健二

### 設計趣旨

那珂川町是那珂川の源流であり水田が多くあった。次第に住宅が増えわずかに残る田んぼがこの敷地の南側隣地にあり失われていく風景をとどめていた。この平屋の家は50代のご夫婦のための終の住処である。回遊式のコンパクトなプランをガラスで包み、その外側に壁を廻すことでできた通り庭や縁側といった外の領域を内部に溶け込ませ生活領域を広げゆとりをもたらしている。格子戸越しに見える水田の季節のリズムが暮らしを豊かなものにし、日本家屋に習い浮かせたスノコ屋根など風に対する工夫をすることで実際涼しく過ごしやすい。稲穂の水平

### 講評

福岡市近郊の住宅地に残ったわずか一枚の田んぼとの関わりを設計テーマに構想されたこの平屋建て住宅の佇まいは、伝統的な日本家屋に風が吹き抜ける静謐な風景を再現しているかのようである。南側に位置する隣地の田んぼに向けて格子戸の付く広々とした縁側が張られ、家屋の両端には、分厚いコンクリートの一字よう壁を衝立てにした風の通り庭を置き、季節感のある光と影をつくっている。鉄骨造の平屋根の全面には、直射熱を和らげるための

面がなだらかに建物へと繋がるひとつづりの風景に見える。分断された風景を修復しながら現代の風景をつくらうとしている。

木製のスノコが張られ、月見のデッキとして楽しんでいるという。室内平面のつくりは、最小限の壁によって仕切られるコンパクトな生活サーキュレーションを構成していて、ユニバーサルな快適性を感じる。質の高い高齢者向き住宅のデザインが求められる現代において、周囲の自然の風景とともに暮らすモデルとして参考にしたい住宅である。願わくは、この貴重な田んぼがいつまでも残って稲穂をつけていってほしいものである。

優秀賞 一般建築の部

## 味の兵四郎



建築主 : (有)味の兵四郎 代表取締役 野見山正輝  
 設計者 : (株)ロイ設計事務所 代表取締役 山本敏元  
 施工者 : 清水建設(株)九州支店 執行役員九州支店長 寺田修

### 設計趣旨

敷地は国道3号線と200号線が交差する丘の上にあり、非常に視認性に優れた場所、ここに視線を受止め街や空間に秩序を与えるランドマークとなる事を意図した。

### 講評

新社屋構想に社員の希望を採用するなどの社長のオフィス空間づくりのイメージを、プロポーザルで選ばれた建築設計事務所がサポート

従業員の大半が女性でアットホームな会社である。

社屋が大きくなってもこの雰囲気を無くさないため、階段を設けた吹抜空間をみんなが集う場所としたり、フルオープンサッシにより内外の境を無くしたガーデンテラスを階段状に配し、各階が一体空間となりより一層密な関係となる事が出来る。

また、コミュニケーションを促すため屋上芝生広場、レクリエーションルーム、茶室を用意した。環境に対して特に地熱を利用したヒート&クールチューブシステムを採用しサスティナブル建築とする。

するという建築計画を先ず高く評価したい。上下階を吹き抜ける階段スペースを社員が集う自由なミーティングの場所とし、その外部にはステップガーデンを設けて憩いの場所にするなど、ゆとりの空間に満ちている。他にも、視界の広がりや爽快なガーデンテラスを各階に設け、執務室や作業室とのつながりを計っている。各階の随所に創り出された小スペースの家具もよく吟味され、個性的なオフィス景観を創りだしている。また設備的には、省エネに有効とされる蓄熱空調方式の採用、地熱の利用、高効率照明の採用などを、建築的には、Low-E ガラスと外部ルーバーの採用、アメニティ向上の屋上緑化施工など、オフィス計画を先駆けるアイデアを実現している。ここまで徹底した快適性を目指したオフィス環境の創造は、この建築が立地する地域の環境や景観のイメージに自ずと良好な刺激を与えていく筈である。

財団法人 福岡県建築住宅センター奨励賞

## 蔵のある家

建築主：(有)辛陽

設計者：(有)Y 設計室 代表取締役 家原英生

施工者：(株)大林組九州支店 常務執行役員支店長 内田弘通





#### 設計趣旨

福岡県西方沖地震の被災後に残された7棟の蔵と、新築のRC造との調和が計画の主題となった。ここでは、住宅の外壁を新たな「漆喰塀」として扱うことで、蔵との消極的調和を目指した。建物の外観は、さりげない塀であり、既存の蔵が主役であって新築建物はその背景となることを意図した。唯一デザインされた来客用玄関棟は、解体した古材を再利用した。小屋組を現しにした玄関ホールは、旧玄関の記憶を引き継ぎながら、外観においては「新蔵」として、新旧融合の象徴的な存在となっている。これまでこの家は、街並みに対しては閉鎖的であったが、道路沿いの塀を撤去して、植栽とともに蔵のある歴史的景観を地域と共有することを実現した。

#### 講評

巨樹や老木が保存された屋敷林のなかに、幾棟もの蔵があり社も祭られるこのお屋敷は、その存在だけでも歴史的価値のある貴重な景観である。「蔵のある家」は、その歴史的価値の再編と家屋の再生に焦点をあてた設計のプログラムを丁寧にひもとき、中庭を中心に配して古い蔵と新しい住居をつないで混在一体にしたスケールの大きい居住環境を創っている。福岡県西方沖地震によって被災した伝統的な木造家屋のイメージを払拭するための鉄筋コンクリート造での新築や、解体した古材や建具を再利用する修理修景の技と術の応用、代々にわたって受け継がれてきた家屋が語る記憶の造形化など、建築の設計で乗り越えなければならないいくつかの課題を抱えて計画されたこの作品は、歴史の重みに堪えられる新しい住まいの独特な文化を形づくっている。このような、日本の伝統的風致である自然と共生してたたく「お屋敷の建築文化」は、これからもずっと受け継いでいっ

てほしい都市の景観である。

財団法人 福岡県建築住宅センター奨励賞

## 第2宅老所よりあい

建築主：社会福祉法人福岡ひかり福祉会 理事長 伊藤明夫  
設計者：風土計画一級建築士事務所 代表 大坪克也  
施工者：(株)山口工務店 代表取締役 山口博徳



### 設計趣旨

地域に馴染んできた宅老所が地震被害で隣町へ新築移転する、というプロジェクトである。これが地域福祉の移転・拡張を意味するため施設計画は当初からまちづくりの視点で捉えられ、職員や支援者らによる計画ワークショップや近隣の人々との意見交換が重ねられた。

建築的には、厳しい敷地条件を逆手に取って福祉拠点としての適度の象徴性と景観調和に配慮したほか、伝統建具の特性を活かして気配を感じる見守りの空間を求めた。また、お年寄りの身体に負担の少ない地中熱利用の自然空調にも取り組んでいる。

### 講評

全国的先駆けとなった地域密着型高齢者施設を新築移転させた建築である。敷地は、五社神社の鎮守の森を背景にした閑静な住宅地にあり、地域に根ざした親しみのある高齢者施設環境を創るという福祉に対する関係者の姿勢が反映された意義のある作品である。周囲の民家のスケールに合わせてデザインされたこの木造建築のボリュームは、まるで以前からここに建っていたかのような佇まいである。木を活かした室内の構成は、日本の建築文化の“しつらい”

縁側や三和土の玄関土間が近隣に開放され「地域の縁側」として育ち始めている。やがては人々の安心のよりどころとなって欲しい。

の場面を見ているようで、入居者の“通い”と“泊まり”がそれぞれの居場所を心地よく隔てながらつないでいる。台所を施設中央に開放的に設けたことで、調理の音や匂いまでがお年寄りにかつての日常の光景を思い起こさせ、スタッフも含めた賑やかな会話を弾ませているという。ローコストでありながら、庭と縁側と畳のある日本建築の立ち居振る舞いをそのまま延長したように生活できる安らぎのある空間の創出は、建築主の福祉へのあり方を設計チームが丁寧に空間造形に反映させた成果であろう。